
初恋と誓

悲劇のM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋と蕾

【Nコード】

N8477F

【作者名】

悲劇のM

【あらすじ】

押し入れを整理していたら、母が昔読んでいたと思われる年代を感じさせられた少女漫画が見つかったので、それに影響を受けて本作を書き上げました。古臭いとかいう意見は無視。

今日も、あいつがいる。

大通りから少し離れた、人気の無い路地にある花屋。会社帰りにそこを通ると、いつも決まってあの男が忙しそうに花を陳列しているのだ。

エプロンが似合う、細身の体躯。髪は肩につくほど長く、だけが整っていて、長い睫毛が印象的だった。爽やかな感じがする若者。目鼻立ちが整っていて、長い睫毛が印象的だった。

接客の態度も良く、たまに来る客に対して愛想良く花を売っている姿が時々見えた。けど、私がそこで買い物をしたことは無い。花なんか滅多に買う機会など無いもの。

そういえば。私は思い出す。今日はお婆ちゃんの仏壇に供える花を会社帰りに買ってきてと同居している母に頼まれていたのだ。

私はその店の中へと入った。外からでもしていたが、中に入ると花の良い香りがすごい。居るだけで幸せになるような気がした。

「いらつしゃいませ！」

やはり、あの男が愛想良くこちらへ駆け寄ってきた。そういえば、初めてこの男の声を聞いたかも。

低いけど、優しい声だった。

「どんな花をお探ですか？」

「仏壇に供える為の菊の花を」

「菊ですね。こちらになります」

男は近くにあった菊の花束を手にとって、私に向けた。私より少し背が高いせいか、彼の髪が顔にあたり、その匂いが鼻腔をつく。花じゃない、シャンプーの良い匂いだった。私のとは違っており、初め

て感じる男の人に匂いに少し困惑してしまった。

「どうしたんですか？」

表情に出てしまったらしい私の困惑を、彼は指摘する。慌てて平静を装いながら応えた。

「何でもないです。その菊、いくらですか？」

「二百円になります」

財布を開け、百円玉を二枚取り出す。簡単な買い物なので、レジでの計算は不要だった。

彼に二百円を渡して、菊の花束を受け取った。一瞬彼の右手が触れて、ドキツとしてしまった。暖かくて大きな、男の人の手だった。

それから何も言わずに、私は店を出ようとした。しかし
「あ、待って！」

彼に呼び止められてしまう。振り向くと、彼が一本の花の蕾を持っていた。燃え盛るような赤い炎が、蕾に優しく灯っている。

「これ、受け取って下さい。理恵さん」

笑顔で言う彼に、私はまた困惑してしまった。何故私の名前を知っているのか。少しの恐れを抱きながら、彼に聞いた。

「あの、何故私の名前を？」

「僕のこと、忘れてしまいましたか？」

「その、ごめんなさい。誰でしたっけ？」

「遼って名前、聞き覚えありませんか？」

遼。一人の男の子が、私の頭の中に浮かんだ。

「遼君！？」

「思い出してくれましたか」

遼。幼い頃家が近くでよく一緒に遊んだ同い年の男の子だ。花が大好きな風変わりな少年で、彼のお
気に入りの秘密の花畑に一緒に行ったものだ。

花の冠を作ってもらったことや、きれいな蝶を追いかけた楽しい記憶が頭の中で走馬灯のように再生される。目の前の男が遼君なんて、信じられない。

けど、彼は色々な都合で遠いところに引っ越したのだ。それが十歳の頃だったから、十五年ぶりの再会だ。

泣き虫だった頃の面影は全く無く、すっかり大人の男になっている。やはり背も抜かされていた。

「本当に遼君なんだね……」

あれ、何故だろう。私の頬に一筋の涙が伝うのがわかった。そういえば私、ずっと遼君のことが好きだったんだ。今になってそのことを思い出したせいで、とめどなく涙が溢れてきた。

「会えて嬉しいです、理恵さん」

彼の両手が、私を抱き寄せる。彼の胸の中で、私は泣いた。彼の胸の温もりが、涙を通して伝わって

くる。いつだったか、茨で指を切って泣いた私を、優しく抱いてくれた時のことを思い出した。彼の温もりは、昔と変わっていなかった。

やがて私を離すと、彼は先程の花の蕾を私に手渡した。

「この蕾、花瓶に挿したら一ヶ月でロゼッタという花を咲かせます」

「ありがと、大事に育てるね」

「これ、おまじないなんです。男が好きな女にロゼッタの蕾を渡して、それが花になったら、二人は

永遠に結ばれるんです」

「えっ、それって……」

「枯らせたなら、僕怒りますよ」

そうやって笑う彼の笑顔に、わたしは彼に恋しているということを確認させられた。

「絶対咲かせるからね」

「さ、早く家に帰って花瓶に挿して下さい。ロゼッタは、すぐく
リケートなんですよ」

「わわっ」

その蕾と菊を持って、私は家への道を急いだ。振り返ると、彼が
いつまでも手を振り続けていた。

ロゼッタの花言葉は永遠^{とわ}の愛

ますように

私達の愛が、永遠のものになり

(後書き)

ROZETTANO HANAKOTO BAY AOMAZINAIH
AUSODESU・TUIDENI・IROMOUSODESU

(ロゼッタの花言葉やおまじないは嘘です。ついでに、色も嘘です)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8477f/>

初恋と蕾

2011年1月13日01時06分発行